

## 平成 18 年度最終報告書

被助成者 特定非営利活動法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会

ル (様式 10)

印

コード番号 06-A-061

実施事業名 バングラデシュ・ダッカ市における少女ドメスティックワーカー支援活動

—家事労働者として働く少女の問題解決に向けての取組み

助成期間 平成 18 年 8 月 1 日～平成 19 年 8 月 1 日

### <報告要旨>

本事業は、都市における子ども達、特に女子の家事使用人のための支援活動を行う。少女たちは家庭内で非常に安い賃金または無給での長時間労働を強いられ、時間や移動の自由もなく、雇い主による性的なものを含む様々な暴力の被害に遭うケースが多い。また、バングラデシュにおいてこの問題について取り組んでいる NGO はほとんどなく、本活動はその意味で先駆的で実験的な取組みである。活動の柱は、支援センターの設立と運営で、現地 NGO 「Phulki (フルキ)」とシャプラニールが協働して実施した。

支援センターは、集合住宅内 (パイクパラ・センター) やスラムの中 (コライル・センター) の 2 カ所に開設した。地域住民の協力も得ながら年齢に応じて保健衛生に関する基礎的な教育や簡単な技術研修の機会も提供するも、両センターで 56 名が参加している。例えば家事講習は主に、部屋の清掃、洗濯の仕方、扇風機の掃除の仕方、などを少女たちに教え、少女たちの安全を守り、またよりよく仕事ができることにより雇用主からも信頼され、それによって子どもたちにも自信がつく。こうして子どもにも雇用主にも活動により積極的に参加してもらおう突破口としても機能している。

また、このような問題は少女たちだけでなく周囲の大人の理解と変化を促さなければ解決しない。そのため、少女たちの家族や少女を雇用している女性を対象としたワークショップを実施した。これにより支援センターでの技術研修などに少女たちが参加することを認めてもらうための下地ができ、また成果を確認するための場となった。

また、この取組みが先駆的であり問題を知ってもらう必要からすべての試行錯誤のプロセス、直面した課題や対応策等を記録し、広くバングラデシュ社会に還元することを目標としたが、記録は蓄積されたものにとりまとめを終了することができなかった。今後もより深い分析と丁寧な事実のまとめを行い引き続き問題の顕在化を図っていきたい。

### 【活動の目的】

都市における子ども達、特に女子が適切な保護を受けられるように支援活動を行う。男子はバザールや路上で働く男子はケースが多いため、フィールドワーカーと接点を持ち保護を受ける機会を得やすいが、女子はその多くが使用人など個別の家庭内の仕事に従事しているため、ストリート・アプローチ、すなわちフィールドワークの死角に追いやられがちである。そこで、女子の多くが従事していると思われるのが、この「ドメスティックワーカー (家庭の使用人)」という労働である。シャプラニールと現地 NGO 「Phulki (フルキ)」(本件の実施団体) の 2005 年 11 月の調査によると少女たちが密室に近い家庭内で非常に安い賃金または無給での長時間労働を強いられ、時間や移動の自由もなく、教育を受ける機会も奪われており、雇い主による性的なものを含む様々な暴力の被害に遭うケースも多いことがわかった。また、バングラデシュにおいてこの問題について取り組んでいる NGO はほとんどない。本活動はその意味で先駆的で実験的な取組みである。

### 【活動の内容と方法】

現地 NGO「Phulki (フルキ)」が実施をとシャプラニールがコンサルタントと資金提供を担当し、協働して本事業を行なう。具体的には下記の活動を行う。

- ① 支援センター：集合住宅内やスラムの中に 2 ヶ所の支援センターを開設する。子どもたちが地域住民の協力も得ながら馴染みやすい装飾を施し、緊急時の駆け込み寺として機能するようにするほか、年齢に応じて保健衛生に関する基礎的な教育や簡単な技術研修の機会も提供する。
- ② ワークショップ：地域住民や、少女を雇用している女性を対象としたワークショップを実施する。支援センターでの技術研修などに少女ドメスティックワーカーが参加することを認めてもらうための下地を作ると同時に、その成果を確認するための場とする。さらに少女の親や保護者とのワークショップも状況の推移を判断しつつ実施する。
- ③ 記録と文書化：すべての試行錯誤のプロセス、直面した課題や対応策等を記録、文書化し、広くバングラデシュ社会に還元することで、問題の顕在化を図る。また国内外の関係機関とも連携を進める。

### 【活動の実施経過および活動の成果】

#### I. 支援センター

期間内に 2 箇所のセンターを設置することができた。

- (1) コライル・センター：2006 年 8 月 1 日開設。コライル・センターはコライル・スラム内にあり、親と同居しながら「通い」で働いている少女たちがメインターゲットとなる。ただし、センターとなった建物の扇風機が非常に低い位置に設置されていたため子ども達への安全性が危ぶまれ、検討の結果、修復を行い 2007 年 1 月にこの作業が完了した。
- (2) パイクパラ・センター：2006 年 12 月 6 日開設。パイクパラはミドルクラスの住む住宅地で、少女達は単身・住み込みで働いている。

#### 活動内容

活動の開始に当たっては、特にパイクパラでは雇用主の抵抗も大きく、スタッフは少女たちをセンターに送ってくれるように地道な戸別訪問による説得を続けた結果下記のように少女達が集まった。また、以下に説明するようなプログラムの教師役に雇用主の人々の参加をお願いしたり、また実際にプログラムに参加した少女が自信をもって変わって行く姿をみて、参加者数や、一回に外出できる時間も増えていくなど、状況がどんどん変化している。ドロップアウトの原因は村に帰った、縫製工場で仕事を得た、家族の引越し(スラム住民は頻繁に住居を移す)、あるいは仕事が多すぎて時間が作れないなどがあった。

センター名	全登録者数	ドロップアウト	参加者	うち 8-12 才	うち 13-18 才
コライル	70	32	38	29	09
パイクパラ	25	07	18	07	11
計	95	39	56	36	20

センターのノンフォーマル教育プログラムは、コライル・センターでは 11 時から 1 時(2 時間)及び 3 時から 5 時(2 時間)の計 2 シフトで、またパイクパラ・センターでは 3 時から 4 時 30 分(1 時間半)の 1 シフトで組まれた。

#### (1) ノンフォーマル教育

基礎的な読み書き: コライル・センターでもパイクパラ・センターの子どもたちも多くが簡単な読み書きができたが、パイクパラ・センターに通う住み込みの子どもたちは勉強時間がまったく取れないというのが大きい問題である。

保健衛生トレーニング: 自身の健康と安全のために、清潔な水を得ることや下痢等病気から身を守る方法を繰り返し学習した。例えば、水を煮沸することや保管方法、また下痢の対処法等などがある。また身を清潔に守ることも学習し、参加者は洗濯した衣服を身につけ、頭髪を櫛で整える、また爪切りの使い方などを習い、目に見える変化があった。これにより雇用主は大いに喜んだ。

芸術: 劇、絵画: 少女たち同士が打ち解けあい、センターに通うことを楽しいことと思ってもらえるように、また、一日のほとんどの時間を働いて過ごす少女たちの楽しみの時間として設けている。両センターで子どもたちの色使いなどがだんだん成長している。パイクパラ・センターの子どもたちは歌を歌うことが好きで、コライル・センターの少女たちより大人びているように感じ、コライル・センターの子どもたちは歌に加えて劇や踊りも大好きである。

経験の共有: グループ内で、あるいは個人で仕事、家族、雇い主、これまでの経緯、楽しかったことや悲しかったことを話し、共有した。時には感情が高まって泣いてしまう子もいるが、参加するごとに子どもたちが積極的に参加するようになっている。

社会道徳: 社会的な道徳や、文化・習慣・マナーなどを学ぶセッション。例えばヒンドゥー教とイスラム教の文化習慣の違いなどを学び、また、センターに通う途中、スラムで受ける嫌がらせに対しての対処法を学ぶなど、彼女たちは自信をつけて明るく積極的になった。

### (3) スキルトレーニング

家事講習: 12月までに内容を準備し、1月より順次実施。主に、部屋の清掃、洗濯の仕方、皿の洗い方、床の磨き方、扇風機の掃除の仕方、などである。これらは少女たちの安全を守り、またよりよく仕事ができることにより雇用主からも信頼され、それによって子どもたちにも自信がつく、ということで子どもにも雇用主にも活動により積極的に参加してもらおう突破口としても機能している。一方、効率のよい仕事ぶりにより却って仕事が増えるなどの不満も聞かれるようになったので、スタッフは家庭訪問をしながら仕事量の調整を図っている。

その他、ちいさな子どもの世話の仕方、アイロンや刺しゅう、料理研修も行った。2月19日(パイクパラ)、3月14日(コライル)で行われた料理研修は、各15名、14名の参加を得た。講師はコミュニティから選んだが、当初この活動に懐疑的だった彼女の心象もその後相当変化したようだ。他の雇用主も講師に興味を持つなどの前向きなリアクションがあった。一方、段取りに不慣れであったため、予定した時刻を大幅に超えての作業となってしまった。これにより、雇用主が心配し、帰宅した少女に叱咤するようなことが起こった。スタッフは、私達の連絡先と起こったことを書いた紙を講師からすべての家庭に配り、少女たちに誤解生じないようにフォローをした。子ども達の安全とプログラムの適切な設定について非常に重要な教訓を得た。

講習	実施回数	
	コライル	パイクパラ
家事講習	39	19
小さな子どもの世話	01	00
アイロン研修	10	02

調理研修	01	01
刺しゅう研修	08	03

#### (4) その他

その他、以下のような活動を行った

性教育: コライル・センターでは 11 月、パイクパラ・センターでは 3 月から開始。大変センシティブな問題であるが、男女別の「いいタッチとわるいタッチ」などで適切なスキンシップとハラスメントになるものを区別することや、体の成長といった部分から入っていき、早婚の弊害やリプロダクティブ・ヘルス、性的ハラスメントを避ける、あるいは防御する方法なども学んだ。

応急手当: 解熱剤、頭痛薬、虫下し、ビタミン剤、などの簡易で基礎的な医薬品を整えた。少女たちは不規則(深夜)に食事を摂ることから胃酸過多などが多く、また仕事の最中のやけども多い。ほとんどの子どもは働き先で治療を受けることができず、このサービスが少女たちを感染症などから守る役割は大きい。

## II. ワークショップ

少女ドメスティックワーカーの問題への取組みはバングラデシュ国内でも新しく、地域や特に雇い主の抵抗は大きい。また、親の無理解なども大きな障害となっている。こうした少女をとりまく環境にワークショップを通じて働きかけることで、より根本的に問題解決へアプローチするのが狙いである。

保護者とのミーティング: 通いで働いている少女が多く住むコライル・スラムでは、その保護者を対象としたワークショップが 12 月 20 日に開かれた。25 名が参加し。ほとんどが働く少女の母親だった。ワークショップでは、プログラムの内容や、センターで受けられるサービスの説明に時間が割かれ、そのメリットを感じてもらえたようだ。また、少女たちの環境を改善する主体としての役割についても伝えた。一方問題点としては、スラムの人々は引越し(移動)が多く働きかけが定着しない傾向も見られる。

住民委員会とのワークショップ: 住み込みで働く少女が多い、集合住宅地であるパイクパラでは住民委員会が組織されている。開所直後の 12 月 2 日にミーティングを持ち、プロジェクトと住民が互いに紹介があった。委員会メンバーや地域の有力者など計 62 名が集まり、このプロジェクトがコミュニティに支えられて、コミュニティと共に取り組んでいくことが説明された。参加者からは協力を惜しまないという声が聞かれた。また委員会から、他の住民計 460 世帯へこのプロジェクトを説明するお知らせが配られるなど本プロジェクトがパイクパラのコミュニティの中に受け入れられている実感を強く持つことができた。その後もコミュニティ内で影響を持つ人たちの訪問は続いている。一方、センターは住民委員会に建物の一部借りているのだが、トイレや部屋を周囲の人が勝手に使うことが頻繁に起こるようになり、6 月に開かれがミーティングでは委員会がイニテチブをとりプログラム中のセンター施設使用について周囲に周知徹底することの合意が得られるなど、協力的な関係が築かれている。

女性雇い主とのワークショップ: パイクパラでは 3 月 26 日には追って、少女たちと尤も接することがおおい女性雇い主対象のワークショップを開催した。25 名が参加した。この中には、既にセンターに少女を送っている人もそうでない人、あるいはこれから新しい家事使用人を雇おうとしている人も含まれている。ここでは、家事使用人の少女をセンターにおくるメリットや、子どもの権利について伝え、また参加者からはプログラムへの提案をもらった。6 月も目標 20 名のところ 26 名が参加するなど、徐々に人数も関心も高まっていることが分かる。両地域ではこうしたワークショップ以

外にも家庭訪問を続けており、新たな人への呼びかけも行なっている。またこのおかげで雇用主や家族の信頼を得ることができ、子ども達の安定したセンター通学の大きな支えになっている。

### Ⅲ. 記録と文書化

通常の報告書とは別にスタッフは週報をつけて日々の業務内容や発見、問題などを記録している。すべての記録は揃っており、現在作業中である。そのため本格的な告知、ワークショップ等は来年度以降に持ち越しとなった。

#### 【今後の課題】

センター開設にあたっては、本事業開始以前からの粘り強いスタッフのフィールドワークの賜物と高く評価している。抵抗の高さは、問題が深刻である、あるいは理解されていない状況の裏返しでもある。また、こういった状況の中で、子どもたちはプログラムに参加したあと、目に見えて清潔になり、雇用主からも仕事が速くなった、いままでできなかったことができるようになった、と好評を得ている。このように、少女たちにとっても学びが多く、雇い主にとってもメリットを直ちに感じられるような展開に持っていけたことは今後の事業展開に非常に明るい材料となった。それにより、より多くの仕事を雇い主が要求したり、子どもたちが自分の賃金値上げを交渉するケースも出てきた。子どもたちの安全と利益を第一に、慎重にファシリテートする役割も今後は大きくなっていくだろう。一方、記録をまとめ、公開していく作業は、毎日のフィールドでの仕事と平行になったため計画より遅れる結果となった。また、経験したことを消化し、問題を言語化して世に問うにはある程度の時間が必要だったのかもしれない。この作業は継続して行なっていく。また、今回の実施はパイロット事業としての側面も強い。この一年の取組みを改めて振り返りながら、今後どのような問題、子どもにどういったアプローチを行なっていくのか、より具体的に組み立てなおすことが今後の大きな仕事となっている。